中国における合作学習の理念と方法の特徴

The Feature of idea and method about cooperative learning in China

王妍蕾
Yanlei WANG

概要：合作学習（cooperative learning）は中国では、学校教育だけではなく、企業における管理など多様な領域で展開されている。本研究で取り上げる合作学習はグループの中で、子どもたちの協働によって学習を進める教育方法の一つであり、日本では協同学習、グループ学習に当たるものである。本研究は、中国における合作学習の理念と方法について、代表的な研究者とされている王坦（山東省教育科学研究所）と劉玉静（山東経済学院）の合作学習の理念と方法をとりあげ、その特徴を整理し、検討する。王坦においては、学習形態論や教師と子ども論、また、劉玉静においては倫理的価値への注目が検討の視点である。こうした検討を通して、今日の中国の学校教育実践に影響を与えることが予想される合作学習の意義と課題を考察した。

キーワード：合作学習　学習形態　協働

1　はじめに

合作学習（cooperative learning）は中国では、企業の管理、高等教育と産業の連携、通常の教育と障害児教育など、いろいろな分野で使われている概念である。本研究で取り上げる合作学習はグループの中で、子どもたちの協働によって学習を進める教育方法の一つであり、日本では協同学習、グループ学習に当たる。合作学習は、１９８０年代末に中国に紹介され、国家基礎教育課程改革が進められて以後、全国各地の教育現場で広がってきた授業方法である。しかし、「中国における合作学習に関する研究はまだ少なく、８０年代から９０年代はじめに、合作学習に関連する海外の理論と成果の紹介にとどまっている。９０年代中頃から近年にかけて、合作学習の実践研究も進み、理念の探求も見られるようになった」（劉玉静　２００２）が、教育実践の方法論としての有効性は確かめられてはいない。学習形態の背景にある理念の研究も十分とはいえない。

本研究は、中国における合作学習の理念と方法について、代表的な研究者とされている王坦（山東省教育科学研究所）と劉玉静（山東経済学院）の所論をとりあげ、その特徴を整理し、合作学習論の意義とこの学習の理論と実践の今日的な課題を考察する。

2　中国における合作学習の展開

合作学習が中国に取り入れられ、さらに広く受け入れられるようになった背景には、最近の２０年間の教育改革の潮流がある。周知のように、中国の教育改革の中心課題の一つは、素質教育の実施である。張梅によれば、「中国の素質教育は経済および社会の急速な変化と発展という大きな潮流の中で全国民の資質を向上させることを目指し、基礎教育における応試教育の弊害を是正する目的で導入され、推進されている教育政策である」（張２００２）。中国の政治、経済および社会の変化をふまえ、応試教育が批判され、国策とし

ての素質教育が提唱されたのである。２００１年６月８日、中国教育部は素質教育の理念の下で、教育課程の改革を目指す『基礎教育課程改革綱要』を公布した。それは、これまでの知識の詰めこみを中心にしたエリート主義教育による教育課程ではなく、子どもたちの学ぶ力、合作力、生きる力など、人間としての全面的な発達を促す教育課程の改革であった。合作学習が中国で展開してきた社会的背景の一つとしてこの基礎教育政策の転換が挙げられる。

一方、教育学研究の発展も無視することはできない。叶瀾（叶２００５）の「中国教育学発展世紀問題的審視」によれば、１９８０年代から、中国では教育学の基礎学科が、人類学、倫理学、脳科学、心理学などに拡大した。盛群力（盛２００４）も合作学習が展開した要因として、教育学研究の発展を指摘している。盛は「合作学習は、一つの先進的な授業方法である。広く国際的に注目され、積極的効果がみられる主流となる思潮である。なぜ、中国の教育課程と授業改革の中で受け入れられ、積極的に実践が試みられたのか。それは、私たちが、流行を追いかけるではなく、教育学と心理科学研究の基礎の上に、教えと学びの性質について、さらに具体的・合理的に認識したからである」と論じている。つまり、教育学と心理学研究の発展は、合作学習の質に注目する契機となったのである。

教育学と心理学研究の発展と共に、学校の実践においても、近年、合作学習の質を探求する研究が進展した。例えば、いち早く合作学習を取り入れた８０年代末の実践の一つとして、杭州市の事例をあげることができる。杭州第十一中学は中学生の「個性優化教育」を探求するために小組合作学習を実施した。

さらに、９０年代の初めには、合作学習の理論と実践に注目した研究も増えた。例えば、華東師範大学の王紅宇は、合作学習を主題に、合作学習と学業成績の関連について、「外国教育資料」で紹介した。王坦は、合作学習の理論的基礎、方略、および研究の国際的な展望についてまとめ、紹介した。さらに、王は、１９９３年から６年をかけて、山東省教育科学八五計画の重点課題、合作学習の基本原理と方法モデルを探求するために、合作学習の研究と実験を組織した。全国で９省市の数百の大、中、小学校で６年の継続研究が進められ、多大な理論と実践の成果を発表した。２００１年５月２９日に公告された『基礎教育改革と発展に関する国務院の決定』においては、「合作学習を通して、子どもの相互的交流、共同的発展、授業における教師と子どもの関係を促進する」（王２００１）と結論づけられた。

以上のような、理論的・実践的研究の成果を踏まえ、合作学習が実質的に展開し、中国の教育課程改革の一環となったのである。それを受けて、合作学習に関連する研究が発展していった。

ところで、２０世紀末から本世紀の初めにかけて、合作学習が広く小中学校で実践され、それに関連する研究も多く見られるようになったが、その研究には次のように特徴がある。

① 合作学習の授業方法の探求は、実践現場の教師の間で、よく議論される課題の一つである。索桂芳、任学印の「情境の設定、目標の確定、独立思考、自習実践、小組討論、集団交流、教師総括」（索、任２００６）がその代表的なものである。それは合作学習の理論の探求というよりも、合作学習が、実際に授業実践の成果にいかに繋がるかを探求したものである。

② 小組の組織に関する研究では、小組の規模、編成、小組内の役割分担が中心的に取り上げられた。鄭淑貞と盛群力は、合作学習における子どもと子どもの協働に注目し、小組内の役割作りについて論じた（鄭、盛２００２）。その役割は「リー

ダー、激励者、記録者、検査者に分けられた。それぞれの役割分担によって、一人ひとりが責任をもち、また、順番で交換することによって、協働活動が順調にすすめることができる」と述べられている。

③ 合作学習の役割と作用では、伝統的な授業とは違う教師の役割についての研究も進められた。張冬梅は「授業準備の段階で、小組の人数、座席、学習活動、子どもの役割分担を決定する。監督、支援と調整、子どもの学習の展開、表現を支援し、学習の速度を調整する。学習内容、目標、技能などを子どもたちに説明する。学習の結果、小組の表現などについて、評価する」と述べ、合作学習の教師の仕事を特徴づけている（張２００４）。

こうした特徴を持つ研究の多くは、実践現場が抱える問題点に注目したものである。しかし、理論と実践を踏まえた総合的な研究は少ない。具体的な授業方法を模索しても、それは、問題の一時的の解決にしかならず、中国の合作学習を体系的化し、実践の理論化を発展させるには、理念の研究が求められている。そこで以下では、王坦と劉玉静を取り上げ、両者の合作学習に関する理念と方法について特徴を整理する。

3　王坦と劉玉静の合作学習の理念と方法

（1）王坦の合作学習の基本理念と方法

王は、中国において初めて体系的に国外の合作学習の主要概念、発展、歴史、基本理念、国内外の実験研究、基本方法と実施-方略、問題および留意点をまとめ、分析した。王は（王２００１）、合作学習を「合作学習は異質小組内の協働を促し、共通の学習目標を達成し、小組全体の成績を評価の基準とした授業策略体系である」と定義した。この定義から、王坦の合作学習は個別学習と一斉学習の中に、小組を規模とした学習形態を重視するものであるといえる。

また、異質のメンバーで小組を組織するのも王の主張である。ここでいう異質とは、学習成績、能力、性別あるいは性格、家庭背景などを指し、２－８人までの子どもたちをひとつの小組に組織する。それぞれ能力、個性、性格の違いがありながら、お互いに協働し、小組内で力を発揮させようというものである。それぞれの小組は異質のメンバーで構成されるが、小組と小組間では比較的偏りのない同質の原則が必要とされる。そして、個人の学習目標だけではなく、全員が同じ目標を目指し、協働しながら活動する。個人の成績ではなく、小組の取り組んだ成績を評価規準とする授業方法を取り入れているのが特徴である。

王坦は、選択理論（choice theory）、学級教授理論（classroom instructional）、動機理論（motivational theory）、発達理論（developmental theory）、認知精製理論（cognitive elaboration theory）、接触理論（contact theory）など、国外の理論に注目しつつ、国内の実験研究を踏まえ、伝統的な授業観と対照し、合作学習の基本理念を論じた。

以下、その特徴を整理する。第一は、学習における相互関係についてである。合作学習は、授業の動態的要素の相互関係を生かし、子どもの学習を促すことが特徴である。これまでの伝統的な授業観とは違い、教師と子どもの相互関係だけではなく、教師と教師、子どもと子どもの相互関係を通して、授業を行う。授業は多様な相互関係の過程だとされている。

第二は、学習における目標観についてである。合作学習は、数値化できる子どもの学業成績だけではなく、数値化できにくい、表現力・交際力を高めることも目標にしている。伝統的な授業理論では、知識・理解中心にする学術的な目標を重視し、子ども同士の交際能力は無視されていた。子どもの協働により、相手のことを考え、話し合い、助け合いを通

して、子どもが能動的に学習に取り組むことができる。

第三は、学習における教師・子ども観についてである。合作学習の中で、教師は管理者、促進者、参与者など多様な役割を演じる。それによって子どもは主体的に学習に取り組むことができるからである。伝統的な授業観における教師と子どもの「権威－服従」的関係から、「指導－参与」的関係に変わるべきだという主張が鮮明に示された。

第四は、学習における学習形態の見方についてである。授業形式の面では、合作学習は一斉授業を基礎にはしているが、小組活動を中心的な活動形式として取り入れ、集団性と個人性の統一を求めるのが特徴である。これは、伝統的な授業が一斉教授を中心とした活動形式を採用してきたのとは異なるものである。異質な子どもたちで構成された小組を編成し、その小組の学習目標に向けて、小組内で協力する。また、小組と小組同士の競争により、子どもの学習に対する意欲が刺激され、学習目標の達成を目指そうとしている。

第五は、学習における状況観についてである。中国では、一般に子どもは学校を競争の場と考える傾向にある。これまでの伝統的な授業では、個人と個人の間の競争意識が高く、他人と協力しない競争観が支配的であった。それに対して、合作学習は、協働的な学習によって、小組と小組の間の平等的な競争を取り入れているのが特徴である。つまり、合作学習は合作を主導的な地位におくと同時に、小組間の競争を通しつつ、学習目標に対する個人の意欲的な活動に価値をおくのである。

第六は、学習における評価観についてである。合作学習の評価は伝統的な授業の評価とは異なる。つまり、伝統的な授業が採用してきた個人への絶対評価ではなく、小組の成績が評価の対象になる。基礎点数と成長点数を取り入れることが合作学習を評価する特徴である。

以上のような王坦の合作学習の理念は、現代の社会心理学、教育社会学、認知心理学、学級教授などの理論を基礎にしたものである。王は、中国の伝統的な授業観と対照しつつ、合作学習の理念を模索し続けてきた。授業の動態要因を基礎に、小組活動を授業の基本的な形式とし、小組の成績を評価基準とし、子どもの学業成績と非認知能力(表現力、交際力、情報収集力など)を高めることを目的としたのが王の合作学習の理念である。この合作学習の基本理念は、これまでの伝統的な授業観の限界を示し、合作学習を用いて、新教育基礎課程改革が求める授業観の具体像を提示したものだと特徴づけることができる。

（２）劉玉静の合作学習の理念と方法

劉玉静は、「合作学習的倫理審思」において、倫理学・道徳の視点から合作学習に注目した。劉は、合作学習の倫理的な使命について「倫理学の学科の性質と本質は合作学習を一種の教育活動とし、その基本的な倫理上の使命は個々人が合作の中でより良く生活することである。同時に、合作の中で知識と徳性の統一、自我の道徳の形成が最終の倫理的な使命となる」と述べている（劉２００６）。

劉は、合作学習の実施過程における倫理思想を課題として取り上げ、合作学習の過程における倫理的現象の内在価値と倫理規範を、人道、公正、と責任の三つの視点から考察した。特定の理想と標準の下で、授業における道徳と不道徳的行為を明らかにした。以下、その特徴を考察する。

第一は、合作学習の道徳性であり、合作学習は、他人を愛し、人の発展を促すことを目指す。つまり、一人ひとりの子どもが内的な潜在能力を持つことを信じ、それをみんなのために発展できるような機会を与える。知識と能力の差異を認め、一人ひとりの自尊心を大事にし、発展させることも可能にするのが合作学習である。

第二は、合作学習の平等性であり、授業の中で子どもは性別、身体、知力、個性、出身などでは差別されない。公正に一人ひとりの子どもが評価されるからである。子どもたちに合理的な競争を促し、それぞれの貢献により、評価することが目指された。

第三は、合作学習における個人の責任である。合作学習は小組の団体成績が評価基準である。共通の目標を達成するため、個人の責任が問われる。個人責任を持たせるため、それぞれの子どもに一定の学習任務を担当させる。小組のメンバーは共通の学習概念と学習技能を把握しなければならない。全員が小組の学習目標に達成することが要求される。

劉玉静の場合、合作学習が授業にいかに貢献するかを倫理学の立場から分析し、王坦の合作学習の基本理念を踏まえて、授業における道徳性の形成を提案したのが特徴である。さらに注目すべきは、山東省任平県杜郎口中学校の実践を踏まえて、校長、教育行政、教師、子ども、保護者、地域住民など、カリキュラムを作成していく上での人的、社会的資源を活用した「全員性合作学習」を提案したことである。

この「全員性合作学習」は、中国の倫理的文化的な思想を背景に提案されたものである。山東省任平県杜郎口中学校は、貧困地区農村中学校である。しかし、８年間の「全員性合作学習」研究によって、学校は「人が基本、命が大事」という点を基本理念として、生徒の自主性を育成する方法を探求した。「全員性合作学習」研究の実践校では、学校教育の質が高まり、廃校寸前の学校から、授業改革の先進校になった。劉は、授業方法としての合作学習から生活方式（学校づくりのあり方）を踏まえて、合作学習に関する研究の新しい視座を提供したといえよう。

おわりに

以上、中国における合作学習の理念と方法について、代表的な研究者の合作学習の理念と方法をとりあげる形で、中国における合作学習の理念と方法の特徴を整理した。それを踏まえて、学校現場で実践されている合作学習を考察し、その課題を探求することが必要である。さらに、劉玉静が提案した「全員性合作学習」の意義については、本研究では十分考察できなかったが、今後の検討課題としたい。

引用文献

・劉玉静　「合作学習的倫理審思」中国教育学刊第７期　２００６年７月

・張梅　「中国における素質教育の意義とその政策のための条件」早稲田大学大学院教育研究科紀要　２００２年９月　５９ページ

・叶瀾　「転換思路進一歩開創素質教育新局面」中山教育２００５年、第６期。７頁。

・盛群力　「什様的教学任務適宜合作学習」教学　人民教育２００４年５月

・王坦「合作学習原理和策略」学苑出版　２００１年１０月

・索桂芳、任学印「新課程体系下学習教学模式的構建」課程･教材･教法２００６年８月

・鄭淑貞　、盛群力「在合作学習中促進生生互動的有効策略」浙江教育学院学報２００２年７月

・張冬梅「関与合作学習組織優化的研究」遼寧師範大学学報　２００４年５月

・王坦「合作学習原理和策略」学苑出版　２００１年１０月

・劉玉静　「合作学習的倫理審思」中国教育学刊第７期　２００６年７月

参考文献

・劉植柱、段金鳳「分層次目標教学、分小組号策学習課堂教学模式初探」教学研究２０００年１月

・斎広平「大班額下小学数学合作学習的実践と研究」東北師範大学学報２００５年５月